

5

アルはリクライニングシートに深く座り直すと、元のコンソールを操作し、乗務員にグラス一杯のミネラルウォーターを頼んだ。

ここ数日続いている異様な身体のだるさが、単なる疲労ではないことをアルは知っている。

初めて診断が下りたのは十年前。毎年受けている人間ドックで血液像の異常を指摘されたのがきっかけだ。初期の宇宙開発に携わった者が、何十年と経ってから造血機能の異常をきたし、ある日突然、急激な転帰を辿る、という噂は前から耳にしていたが、まさか自分に降りかかるとは夢にも思わなかった。今は少しでも造血機能を維持するため、増血剤の内服や人工コルチゾールの注射を続けているが、アルの寿命があとどれくらい持つのか、血液学の権威でも予測することはできない。せめて二年、いや三年、現場を指揮する余力が残されているなら、採鉱システムを盤石のものとし、ファルコン・マイニング社の土手っ腹に風穴を開けてやるのだが、こればかりは天の計らい、人間の意思で

どうこうできるものではない。

所詮、運命には勝てぬのか。それとも最後には人間の意思が打ち勝つのか、アルには未だに分かりかねるが、ただ一つ確かなのは、『フォルトゥナ Fortes fortuna adiuvatアドヴァルト（運は勇敢な者たちを助ける）』ということだ。

程なくコンパートメントのドアがスライドし、乗務員ではなく、セス・ブライトが顔を覗かせた。

セスは、アステリアの海洋開発を支援するために設立したアステリア・エンタープライズ社の専務取締役で、長年アルの右腕を務めてきた。年齢はアルより八歳年下で、五十の坂を少し越えたところだが、すらりとした長身と映画俳優のような顔立ちで、実年齢よりずっと若く見える。今も紳士服のCMから抜け出たような紺色のビジネススーツをそつなく着こなし、軽く流した亜麻色の髪と涼やかな薄茶色の瞳が知的な雰囲気醸しだして、辺境の社屋の一室で書類相手に生きているのが勿体ないほどの器量である。

セスは、海老とアボカドのサンドイッチとプロテイン入りカップスープ、グラス一杯のミネラルウォーターをアルにすすめると、向かいのシートに腰を下ろした。

「君はいつも絶妙のタイミングで欲しいものを持って来るな。何かコツでもあるのかね」

アルが大げさなくらいに感嘆してみせると、セスは映画俳優のような顔をほころばせ、「もう二十八年も一緒にしているのですよ」と微笑した。

そうか、二十八年か。

セスと北米の大学の図書館で初めて出会った時、アルはまだ黒髪のふさふさした威勢のいい若造で、セスはマリンスポーツの得意な十九歳の大学生だった。それが二十八年の歳月を経て、アルは経済誌の表紙を何度も飾るほどの経営者に成長し、セスも名前こそ知られていないが、アステリアでは実質上のナンバーツーとして、資金調達、供給、法務といった後方支援を一手に引き受けている。

セスもステラマリスにいれば、それなりに裕福で、多様な選択肢があっただろうに、突然、アステリアのような未開の星に来て、二十八年間もアルの後ろで事業を支えてくれた。その真の動機について、セスは一度も口にしたことがなく、アルも正面から訊いたことはない。互いの家を行き来するほど親しい間柄にも関わらず、肝胆相照らすような会話は皆無だ。だが、一

緒に会社を切り盛りするには、その方が都合がいい。何事もビジネスと割り切り、頭の芯まで澄み渡るようなセスの伶俐さが、アルにはかえって心地よかった。それは自分と価値観を違えた相手でも、ひとたび主と心に決めたら、己を滅却しても忠実に仕える参謀の才覚であった。

アルはサンドイッチを平らげると、背広の胸ポケットからピルケースを取り出し、二種類の錠剤をミネラルウォーターで内服した。アルの本当の病状を知っているのは、セスと姉のダナだけだ。M I Gの重役にも詳細は知らせていない。

十年前に診断が下った時は絶望で目の前が真っ暗になったが、いろんな症例を調べたところ、二十年以上生き長らえた人もあり、ならば希望を繋ごうと腹を括った。

一方、不測の事態に備えて経営体制も万全にし、何時その日が来ても現場が混乱せぬよう、二の手三の手を打っている。ある意味、自分の死を強く意識すればこそ、十年、二十年先を読み、M I Gの経営体制を盤石にできたともいえる。

そう考えれば、この病は死に神であると同時に生き

神だ。この世に幸運も不運もなく、運命はただ試すだけである。

そして、運命というなら、採鉱システムのプロジェクト・リーダーの死も同様だ。

七月末日、三回目のテスト採鉱に成功し、十月十五日の本採鉱に向けて、いっそう機運も高まった夜、洋上の採鉱プラットフォームから忽然と姿を消した。いつものように朝が訪れ、ミーティングの時間になってもプロジェクト・リーダーが姿を現さないで、同僚が居室を訪ねたところ、部屋の中はそのまま、隅々まで探し回ったが、どこにも見当たらず、朝に姿を見かけた者もない。島から八〇キロメートルも離れた水深三〇〇メートルの外洋で、六十過ぎの男が夜中に泳いで抜け出せるはずもなく、最後に作業甲板で姿を見かけた作業員の証言から「夜中に泥酔して海に落ちた」と結論づけられた。

本採鉱まで、二ヶ月余り。

まるで最後の最後に運命の歯車が狂ったとしか言いようのない中、アルは直ちに決断を迫られた。

一つは本採鉱を延期する。

もう一つは、プロジェクト・リーダー抜きで揚鉱管ライザパイプの接続ミッシオンを完遂するかだ。

揚鉱管の接続は、海台クラストの広がる水深三〇〇メートル下で潜水艇と有索無人機を用いて行われる。深海底の集鉱機、水中リフトポンプ、洋上の選鉱システムを一つに繋ぐ最終工程で、非常に高度な水中技術を要する。

もちろん、採鉱システムは、悪天候、機械トラブル、人為的ミスなど、あらゆる危機を想定して設計しており、プロジェクト・リーダーが失われたぐらいで機能不全に陥るほど脆弱ではない。

それでも十月十五日のシナリオは、プロジェクト・リーダーを中心に組み上げてきた。一つの狂いが全体に波及し、予期せぬ問題を引き起こさないと制限らない。接続ミッシオンの遅延は、製錬所や運輸業者の段取りを狂わせるだけでなく、半製品を加工する工場や中継ぎを行う商社、しいては宇宙航空、自動車、建設、精密機器など各種メーカーにまで波及し、MIGの信用を著しく損なう恐れもある。

自分でも「完璧」と思えるシナリオだったのに、こ

れも運命の試練なのか、それとも慢心への戒めか。

あれこれ思い巡らせながら窓の外を見つめると、セスがさりげなく訊いた。

「十月十五日の接続ミッションは予定通り決行するのですか」

アルは窓の外を向いたまま「さあね」と答えた。

返事は素っ気ないが、セスには（腹の中で既に答えは決まっている）と分かる。

十月十五日はノア・マクダエルの誕生日であり、真空直接電解法の新炉が稼働した日でもある。どうせ打ち上げ花火を上げるなら、記念すべき日に壮快に決めたい気持ちにはセスも同じだ。海底鉱物資源の採鉱システムが完成し、アステリアの海でもニムロディウムの採掘が可能になれば、再び市場に新風が吹く。それは鉱業のあり方を根本から覆し、社会の構図も変えるだろう。

その為にも、十月十五日は予定通り接続ミッションを施行し、本採鉱に繋げたい。海台クラストから揚収されたニムロディウムが市場に出回るようになれば、今度こそ『ネンプロットの蛇』と呼ばれる男に引導を渡し、ファルコン・マイニング社の一党支配に風穴を

開けることができるだろう。

アルは深く座り直すと、再び窓の向こうを見やった。眼下には銀のパノラマが広がり、どこまでが工場で、どこからが住まいか見当もつかない。完全自動化された工場は不夜城のように煌めき、人々が深い眠りに就いた後も部品を組み立て、世界中の店舗や倉庫に製品を送り出していく。

人間の欲望はどこまで際限がないのか、自ら市場競争に身を置きながらも世俗には懐疑的だ。そして、海底鉱物資源を知らなければ、アルもまた朝に夕に利益を追いかけ、ありきたりの世襲社長で終わっていたかもしれない。

まこと人生と呼ぶにふさわしい生き道を与えてくれたのは、アステリアの海だ。その為にも、どうしても潜水艇のパイロットが欲しい。水深三〇〇メートルの海底で揚鉱管を繋ぐために。

アルが初めてアステリアの海に降り立ったのは、一六八年一月、トリヴィアの産業省が主催する海洋産業研修ツアーがきっかけだ。

アルの幼少時は、安全性の見地から一般の渡航が厳しく制限され、入領できるのは学術団体や政府関係者など、省庁の認可を得た者に限定されていた。

だが、政府の鳴り物入りで設立された海洋化学工場『J.P.S.O.D.A』が工業用ナトリウムやマグネシウムの製造に成功すると、様々な事業者が参入するようになった。アルが二十歳になる頃には厳しい入領制限も解かれ、J.P.S.O.D.Aのあるメアリポートを中心にオフィスや工場、集合住宅や公共施設が建ち並ぶようになった。しかし、アステリア独自の産業は海洋化学工業とそれに付随する製造業に限られ、海の恵みをフルに活用しているとは言えない。

アルは鉱物学者の父子からアステリアの海に眠る鉱物資源について聞かされ、自分でもいろいろ調べてみたが、それを採掘しようという話はどこからも出たことがなく、研究すら行われていない。

しかし、どうしても諦めきれないアルは、一度この目で見てやろうと知己の口添えを得て、産業省の企画する海洋産業研修ツアーに参加した。

アステリアの上空で待機する母船から「ネレイス」と呼ばれる空海両用機が降下され、ローレンシア島か

ら一〇〇キロ離れた遠洋に着水すると、アルはカメラ片手に船室を飛び出し、最上階の展望室に急いだ。

ところが、展望窓の向こうに見えるのは茫洋たる大海だけ、手を掛ける場所もなければ、足を踏みしめる大地もない。吹きすさぶ風の下、果てしない水の平原が広がるばかりである。しかもネレイスの浮かぶ一帯の水深はなんと六〇〇メートル。地上五〇階の高層ビルを二〇個並べたより、まだ深い。

そんな海の深みから、どうやって海底鉱物資源を揚収するのか。全長六〇〇メートルのホース付き掃除機を下ろして吸い上げる？ それともSFアニメのような巨大ロボを海底に降ろして、石拾いさせるか。まともな深海調査船もアステリアには無いというのに？ 目の前の大海を茫然と見つめていると、同乗していたステラマリスの海洋科学者が言った。

「あなた、本当にこの超高压を掻き分けて、水深数千メートルの海底から鉱物資源を揚収するつもりですか？ 真空や無重力は今の技術でどうにかできても、水は簡単に制御できません。変幻自在に形を変える上、止めることも、掴むこともできず、僅かな鉄板の隙間から鉄砲水のように入り込み、金属をも破壊するから

です。仮に水深三〇〇メートルの海底から鉱物を揚収するとしましょう。それは標高三〇〇〇メートルの山頂から麓の果樹園のリンゴを拾い集めるようなものです。的確にリンゴを採るのも難儀なら、集めたりリンゴを頂上まで揚収するのも至難の業だ。ましてそれを商売にしようと思ったら、数キロ採ったぐらいでは話になりません。そんな無謀なリンゴ狩りをするぐらいなら、隣の果樹園からリンゴを仕入れた方がはるかに安上がりです。あなたがやろうとしている事は、それぐらい無謀でリスクだ。ステラマリスでも本気でやろうとしたベンチャー企業があつたが、多額の負債を抱えて倒産しましたよ」

それでもファルコン・マイニング社の一党支配を崩すなら、アステリアの海底からニムロディウムを採ってみせるしかない。幾千の労働者を酷使して鉱山の深部から採掘するのではなく、完全自動化された新時代の採鉱システムを用いてだ。

アステリアの海に魅せられたアルはすぐさまステラマリスに向かい、名だたる海洋研究所や企業の門を叩いて教えを請うた。セスに出会ったのもこの頃だ。大学の図書館で同じ本を探し求めていたのがきっかけで

ある。

それから二年後、アルは再びアステリアを訪れ、工業港の建設計画が進む砂利浜に佇み、今一度、自身に問いかけた。

既に頭の中には海を拓くのに必要な知識、技術、ノウハウが詰まっている。至難ではあるが、絶対不可能ではないことも心が識っている。

だがローレンシア島の沖合に採鉱プラットフォームを建設することは社運を懸けた一大事業だ。下手すればMIGや自己資産のみならず、祖父が築いた技術革新の金字塔まで損なう恐れがある。最悪の結末を思えば総身が震え、引き返すなら今のうちと諫める声がある。

だからといって、良質なニムロディウムを得る為に、生涯犬のようにファルコン・マイニング社の足元に這いつくばって、真の経営者と胸を張って生きていけるのか。死力を尽くせば達成できたかもしれないことを生涯胸に抱えたまま、自分に言い訳しながら一生を終えたいか。

否、否。

この日の為に姉のダナと幾度となく話し合い、何通

りものビジネスプランを練り上げてきた。いくらか背伸びする部分もあるが、決して無謀な賭けでないことは心が識っている。

Nunc aut nunquam. (今行うか、永遠に成さないか)

アルの脳裏に祖父の声がこだまし、目の前に採鉱プラットフォームの威容が浮かぶ。

海中深く突き立てられた揚鉱管と水中ポンプ。

深海底で採掘する破砕機と集鉱機。

洋上のプラットフォームには高さ六〇メートルのタワーデリックがそびえ立ち、若いオペレーターが遠隔操作する水中無人機が巧みにサポートする。

今、この砂利浜には静かに波が打ち付けるだけだが、ここに第一埠頭、あそこに第二埠頭、その裏手には工場や倉庫が建ち並び、造船所では最新の海洋調査機器を備えた支援船が建造される。それに併せて、道路、通信、オフィス、集合住宅、学校なども開かれ、真の自由と公正を求める志高い人材が続々と集まってくる。今後アステリアが海洋化学工業を中心に発展するのは疑いようもなく、たとえ採鉱事業は成らなくても、二の手、三の手を打てば、物流や都市開発で先行者利益

を得ることは十分に可能だ。

やるなら『今』しかない。

後で他人の成功に地団駄を踏んでも、チャンスは二度と戻らない。愚図な二番手は永久に一番手の尻を舐め、何を見せても二番煎じと侮られるだろう。

アルは砂利浜に最近操縦を覚えたばかりのモーターボートを引き上げると、これを繋ぎ止めるための杭を一本打ち込んだ。やると決めたら、しばしばこの砂浜を訪れることになる。今は砂利浜以外に何も無いが、いつか必ず採鉱システムを完成し、奴らの目に物見せてやろうではないか。

Nunc aut nunquam. (今行うか、永遠に成さないか)

力強い槌音が浜辺に響き渡る中、アルはひたすら杭を打ち続けた。今日の決意を生涯胸に刻みつける為に。